

【小出】 先ほどちょっと言いました岐阜県の輪中地域の家には天井に船が乗っていますよね。本当にあれこそ、フェイルセーフの思想の原点だと思うのですが。自分たちの力で輪中という堤防を造る。それで、乗り越えてまた来た時には船で逃げるという。まさに分散して、防御するというのが徹底していると思うのですが、その思想が、何となく現代というのは、すごく発達しているから、高度な機械でやってくると。でも神戸の地震の時に僕は、現地で自衛隊の第10師団の師団長とばったり会いました。東灘区で壊滅状態です。それぞれ神戸の家にスコップが1本でもあつたら、何百人助かったのにと。とにかくスコップで掘って、空間を作るのです。本隊が来るまでにどう時間を確保するか、それがほとんどの家にスコップがない。テコの原理で空間を作ることができない。それでいろいろな人がいっぱい亡くなつた。それくらい、道具を忘れてしまつていて、正に分散というのは、各家にスコップを持っている事だと思うのですね。本隊重視主義の重厚長大中央集権というのは、救急車を何台か配備せよという思想だけれども、現実には救急車は走れないわけです。正にそういう思想の延長線上に、高潮のこ、あれは本当におもしろいと思いましたね。あちこちにあつたら、しゃれたデザインにしたらずつといいですよね、堤防なんかより。

【畠村】 そうだと思いますね。あれも、どうせやるならコンペにして、それぞれの所がやるようにすればいいし、きっと1個ずつの所、1個の小学校に一つとかね、イベントと組み合わせるような事をやって、何かできるのではないかという気がします。まあ、冗談半分でもいいから一度は少し考えてみるといいかもしれませんね。

【小出】 防波堤でも堤防でもですね、たとえば、イギリスの南部の方のブライ頓などは、堤防は3階建てになつていて、有料なのです。1階が普通の小舟が着くピア、2階が投げ釣りする人のフロア、3階がレストランとゲームコーナーなのですよ。それで平時は結構楽しいわけです。堤防の一番上で夕陽を眺めながら晩飯食つたり。それで、入るのに1ポンドくらい料金をとる

のです。でも、そうするとみんなが堤防に行くわけです。日常的に海を見て、今日はすごい波だなあと、そういう自然の驚異がわかる。もうちょっと日本の堤防ももっと楽しさを加えるとか、高潮のこも、てっぺんにはサンデッキとかを置いたりね、そういうものになると、本当に自然体で自然の災害や脅威に備えるという文化が生まれるのではないかと思うのですけど。竹村先生お願いします。

【竹村】 今、畠村先生の伊豆の話のような大変な問題が潜在的にあるのだけれども、地元の人がわからないという問題は、災害をやっている私どもの本当の大きなテーマとして、実は私どもの責任もあるのです。災害を起こさないように努力してきたわけです。災害が起きてはいけないので。災害であれ、交通渋滞であれ、ともかくインフラをやっている人間は、何かが起きてはいけないです。起きないように日々努力をしているところが、警察などは違うのです。事故が起きてから勝負するのです。ジャーナリストもそういう、事故が起きてから何か自分たちの活躍の場がある。我々のインフラをやっているのは、常に起きないように起きないようにという。実際台風が来て、洪水が来て、何もなかつたとします。そうすると、それはなかつたことになるのですね。あつたのだけれど、何もないから。ところがある災害が起るとあつたことになる。ですから、私どもが災害をないように努力してきたということは、災害がなかつたとしたら、自分たちの存在がフェードアウトする存在なのです。そこは非常に自分たちが自己矛盾している。努力して、それが成果があると自分たちの存在がフェードアウトしていくというのがインフラ屋の宿命みたいなもので。ですから、私どもがそういう努力をしてきた時、必ずそれがあるのだと、いつか必ずあるのだとということをやはり見せなきゃダメです。というのは、今もコンピューターの能力が非常に高く、シミュレーションが簡単にできますので、集落ごとにある規模の津波が起つたら、こんなふうになりますよと、ある集落毎に土石流が起つたら、木材がこんなふうに襲つてきますよという事を僕たちは見せないといけない。非常に行政はそれを躊躇しています。そういう努力をしていく